クレストストーリー

遊戯

クレストストーリー

第1話　～友を思う心～　第1の紋章。

「ねぇねぇ聞いた？あの話。これで4回目よね。」

「今回はけが人も出たらしいぜ。」

「怖いよな。俺、家近所だから夜外でれねぇよ。」

クラスではある話題でもちきりになっていた。

ある話題といっても火の玉。いわゆる心霊現象ってやつだ。

最近この町で、火の玉が見られるという噂が広まっているのだ。

(くだらない・・・)

心霊現象なんてありえない。単なる見間違えか思い込みだ。ポルターガイストにせよ心霊写真にせよ、そんな非科学的なことがあるはずない。

私はクラスの話題に混じることもなく、淡々とした日常生活を過ごしていた。

「なぁなぁ蓮。明日から夏休みだし、美術部のみんなで肝試ししないか？」

クラス一のお調子者で僕の幼馴染の源太が話しかけてきた。

正直僕はこいつが苦手だ。

“こいつ”というよりそもそも“人”と行動するのが好きじゃない。

どうにも小さい頃からそうだ。クラス会とか修学旅行とか、みんなで何かするのは苦手だ。

だから人の少ない美術部に入ったのに・・・なぜか僕の年だけ美術部員が多かった。

「いいよ俺は。みんなでいってくれば。」

突っぱねるようにいった。

「そんなこというなよ～。みんなでいけば楽しいって！」

こいつはいつもこうだ。突っぱねてもしつこくくる。そして結局いつも僕が負けて彼に付き合うのだ。

そして今回も案の定そうなった。

「わかったよ。」

「よしっ。じゃ明日午後9時に南町の公園に集合な。」

「はいはい。」

南町。ここは最近の火の玉がよくみられることで有名な場所だ。まぁ信じはしないが・・・

翌日午後9時。

美術部員10人は南町の公園に全員集まった。

「はぁ。」

面倒臭さからだろうか、どうしても溜息がこぼれた。

「よし！じゃあみんなで肝だしにしゅぱーつ」

源太が威勢の良い声をあげて音頭をとった。

何がそんなに面白いのか。火の玉なんて出るはずない。どうせ何かの光に決まってる。

肝試しは行20分、帰り20分の合計40分のコースになっていた。多分源太が勝手に決めたのだろう。

僕たちは南町の公園からスタートして、南に歩き始めた。

見慣れた景色だ。このあたりは小さい頃よくとおった。

途中色々冷やかしたりする奴らもいたが、なんとかスタートから30分がたった。あと10分。あと10分でこの退屈な時間が終わる。

僕は少し嬉しくなった。

「なんもなかったね。」

誰の声だろうか、後ろの方から声が聞こえた。

当たり前だ。火の玉などあるわけないだろう。

僕は心の中であざ笑うように言ってやった。

ようやくゴール地点が見えてきた。あと少し。あと100mぐらい・・・。あと50m・・・。あと10m・・・。

ようやくこれで無駄な時間から解放される。

そう思った、まさにその思った時だった。

「うわっ！」

先頭を行っていた源太の声がした。

石にでもつまずいたんだろうか。

僕は声につられて前の方を見渡した。

そこには・・・

「そん・・・な・・・」

火の玉だ。

紛れもない火の玉。

何かが燃えてるわけじゃない。

本当に火が空中に浮いている。

それだけじゃない。なぜだろう、体が動かない。

それになぜか火の玉はゆっくりと僕たちの方に向かってきた。

逃げなきゃ。何か嫌な予感がする。

「みんな！逃げるぞ！」

僕は部員みんなに目を向けた。だが・・・

「来るなっ・・・。来るなっ・・・。」

みんなは腰を抜かしていた。立つ力さえ出ないようだ。

なんとかしなきゃ。なんとかこの場から逃げなきゃ。

でもどうしよう。こういう自分も脚に力が入らない。

火の玉は速度を上げて先頭の源太の近くまでせまっていた。

「くっ・・・くる・・・」

声も出なくなってる。これじゃ逃げきれない。

なんとか、源太を守らなきゃ。

「まっ、待てっ！」

声は震えていた。自分の体じゃないみたいだ。震えがとまらない。立つことさえできない。

でも・・・守らなきゃ。守らなきゃ源太が・・・。

火の玉は僕の声に構うことなく源太に向かっていった。

「くっ・・・くるな・・・」

あと2m・・・。1m・・・。

「くそっ・・・。」

悔しい・・・友だちがピンチなのに・・・

助けなきゃいけないのに・・・

動け。早く動いてあの火の玉をなんとかしないと・・・

感情がコントロールできないほど高ぶった。そしてその瞬間だった。

「えっ。」

不思議な感覚が体を駆け巡った。

誰かに押されるような・・・

体が軽い。今までが嘘みたいだ。

これなら・・・

体は勝手に動き、拳は火の玉に向かっていった。

(源太を。みんなを守るんだ。)

自分の創造より体は早く動き、拳は火の玉に触れる寸前までいっていた。

あと、少し。あと少しで火の玉に拳が届く。まさにそのときだった

「くっ」

目の前が真っ白になった。

「・・・。」

目を開けると目の前には同い年ぐらいだろうか。赤い髪の人間がいた。

「惚れたぜ、お前の友情。」

突然の出来事に混乱した。

見知らぬ場所で、見知らぬ人間。それにいきなり何を言い出すかと思えば・・・。

「何をいっているのか。それよりここはどこだ。僕は火の玉を止めようと・・・」

僕の質問に赤い髪は笑顔で答えた。

「あぁ。良い友情だったな。」

「意味がわからないよ。これはなんなんだ。もしかして僕は死んだのか？」

「まさか。ここはお前の心の世界。」

何がなんだかわからなかったが、死んではいないということに少しだけほっとした。

「じゃあ早く元の世界に戻してくれ。源太がピンチなんだ。」

「知ってるよ。でもあの火の玉に触れたらお前燃えるぜ。当たり前だけど。」

彼の言葉にふっ我に返った。確かにそうだ。火に触れれば燃える。

というより、なんで自分は火の玉に向かっていったんだろう。

少しだけ自分が分からなくなった。

「ま。それは置いといて。これからお前を元の世界。元の時間に戻す。もちろんお前が火の玉を殴る手前から。」

「でもそしたら君の言う通り僕がもえるだろ。」

我ながら急に冷静になれていた。ほんとに今の自分は不思議だ。

「大丈夫。俺の力を貸してやるよ。」

「君の力？どうやって。」

「自分の手の周りに炎を思い浮かべて、あとは勢いで思いっきりあの火の玉を殴れ。」

つくづく意味がわからなかった。

「自分の手の周りに炎を思い浮かべて何がおこるんだよ。」

「ほんとに炎がでるんだよ。」

なんだかバカにされてる気がした。冷静になって考えれば、そもそもこれは夢にちがいない。さっきからめちゃくちゃすぎる。

そう思うとむしろ夢な確信があった。まぁそれならそれで良いのだが。

「残念ながら夢じゃねぇよ。」

やっぱり夢だ。心に思ったことが彼に読まれてる、そんなこと現実にあるはずがない。

「ま。時期にわかるさ。じゃ時間を戻すから、ちゃんということ聞くんだぞ。」

軽い気持ちではいたが、それでも少しは気をいれた。もしかしたら、これは現実かもしれないという思いがどこかにあったからだ。

「わかった。」

「よし。じゃいくぜ。」

彼は指を鳴らした。

その瞬間、ここに来た時と同じように前が真っ白になった。

その直後。自分は本当に火の玉に拳を伸ばしていた。

赤い髪の男の言う通り、手の周りに炎を思い浮かべた。

「なっ」

自分の目を疑った。

本当に自分の手の周りに炎が出てきた。

なんだこれは。ただ考えてる間に拳は火の玉に向かっていった。

「ドォーン」

拳は確かに火の玉をとらえた。

ただ何か変だ。確かに火に触れたのに熱くなかった。

気付くと火の玉は消えていた。

そして自分の手の周りの炎も消えている。

夢？これはやっぱり夢なのか？

「れ・・蓮。」

後ろから源太の声がした。

結局このことは、火の玉は何かが燃えてて、それを僕が殴って火を消した。ということでみんな納得した。

だがそんなことより気になることがあった。

あの事件のあと、僕の首にはペンダントがかけられていたのだ。

ペンダントなんてあのときもってなかったのに。

ただなぜかこのペンダント、捨ててはいけない気がした。

むしろずっともっておかなきゃいけない気さえした。

夏休みの1日目。僕は少し不思議な体験をした。

だがまさかこれからあんなことが起こるとは・・・